世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

A Study of Buddha Footprint Waka Inscription in Yakushi-ji Temple Ⅱ：About the Sho and its Contents Engraved on the Lower Half of the Monument

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 裕之, 漆原, 徹, 遠藤, 祐介 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1707

薬師寺の佛足跡歌碑の研究Ⅱ
―碑面下半部に刻された書とその内容について―

A Study of Buddha Footprint *Waka* Inscription in *Yakushi-ji* Temple Ⅱ:
About the *Sho* and its Contents Engraved on the Lower Half of the Monument

廣瀬裕之*
HIROSE Hiroyuki
漆原徹†
URUSHIHARA Toru
遠藤祐介††
ENDO Yusuke

『武蔵野教育学論集』第十号所収（二〇二一年三月発行）

本稿は、右の論考を承け、同碑面下半分（第12行目から）に刻された万葉仮名で記された佛足跡歌碑銘文の書を薬師寺所蔵の拓本と原碑の碑面調査及びその写真を基として摩滅前の刻の姿をできるだけ明らかにして復元することを試みたものである。そして、本文、現代語訳、注釈を提示し、これを手掛かりとし、この歌碑について仏教学の面からも考察を加えた。また、奈良時代以後、佛足石の存在は、従来の研究では空白期を迎え、その後江戸時代になると佛足石がまた盛んに造られるようになるのだが、その空白の期間（中世）のその存在を埋める佛足石の存在について探るべく私たちはその調査をあわせて行い、前年度に引き続きその新しい成果を収めることができたので記したい。

一、はじめに

本研究は、「中国仏教の日本への受容」をテーマとして「しあわせ研究」の調査を続行する中で、天平勝宝五年（七五三）刻の日本最古の「佛足石」に刻された銘文の書とその背景について書道学（廣瀬）・歴史学（漆原）・仏教学（遠藤）から論考し、最初に「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究」を共同で進め研究論文三篇を発表してきた。

令和二年度からは、この佛足石のすぐ隣に現存する「佛足跡歌碑」に注目し左記の論考を発表した。

・「薬師寺の佛足跡歌碑の研究Ⅰ
　―碑面上半部に刻された書とその内容について―」

▼原刻拓本と六朝時代の碑刻文字との比較

▼歌碑「歩」字と近似した日本の書

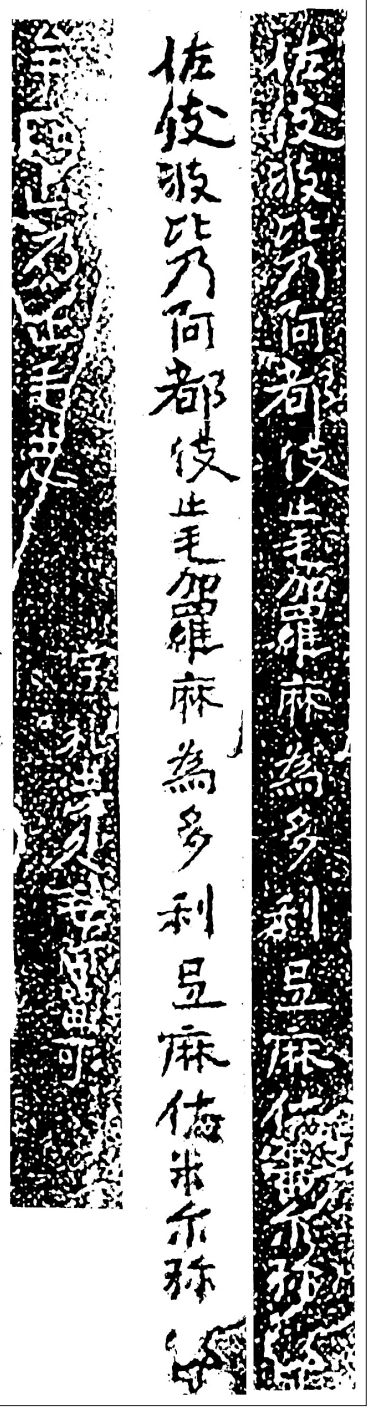
▼原刻

二、銘文の書風と書としての復元

佛足跡歌碑の銘文には、中国・六朝時代の碑と同一字形の文字が多数存在する。文字の大きさが小さく細く、また万葉仮名のイメージから一見穏やかそうなイメージだが、よく熟視するとその刻線から、薬師寺佛足石銘文と同様、この刻書の書風も六朝時代の書の影響をかなり受けていることが判った。「牟・呂」のように線質と字形が近似したもの、「微」のように近似しつつも字形の一部分を強調したものがあるが、「阿・美・等」のように六朝の細身で造形豊かな楷書の字形を取り入れつつも和的に和ませたもの、「歩」のように六朝の異体字に草書的な省略を加え楷書化した字形もある。この独特な「歩」の字形は、王勃詩序や趙志集・空海の書跡中にも見られ、奈良・平安時代の日本においてほかにも使用例があることが判った（右表参照）。

▼図版　佛足跡歌碑（下半部）の原拓と書の復元

12行目



13行目

14行目

舍加乃義阿止伊波尓宇都志於伎由伎　深旦利宇

舍加乃義阿止伊波尓宇都志於伎由伎　深旦利宇

夜麻比麻都利和我与波乎閇年　己乃与波乎閇年

夜麻比麻都利和我与波乎閇年　己乃与波乎閇年

15行目

久須理師波都祢乃毋阿礼等麻良比止乃伊麻乃久須

久須理師波都祢乃毋阿礼等麻良比止乃伊麻乃久須

理師多布迩可理家利　未太志可利鶏利

理師多布迩可理家利　未太志可利鶏利

16行目

已乃美阿止乎麻婆利麻都礼婆阿止奴志乃多麻乃
已乃美阿止乎麻婆利麻都礼婆阿止奴志乃多麻乃
与曽保比於毋保由留可母　美留期止毛阿留可
与曽保比於毋保由留可母

17行目

於保美阿止乎美尓久留比止乃伊尓志加多知与乃
於保美阿止乎美尓久留比止乃伊尓志加多知与乃
都美佐閑保□□支止曽伊布　乃曽久止殿伎久
都美佐閑保□□支止曽伊布

18行目

比止乃嶽波衣加貝多久阿礼婆乃利乃多能与須加止

比止乃嶽波衣賀多久阿礼婆乃利乃多能与須加止

奈礼利都止米毛呂毛呂　須乃賣毛呂毎呂

奈礼利都止米毛呂毛呂　須乃賣毛呂毎呂

19行目

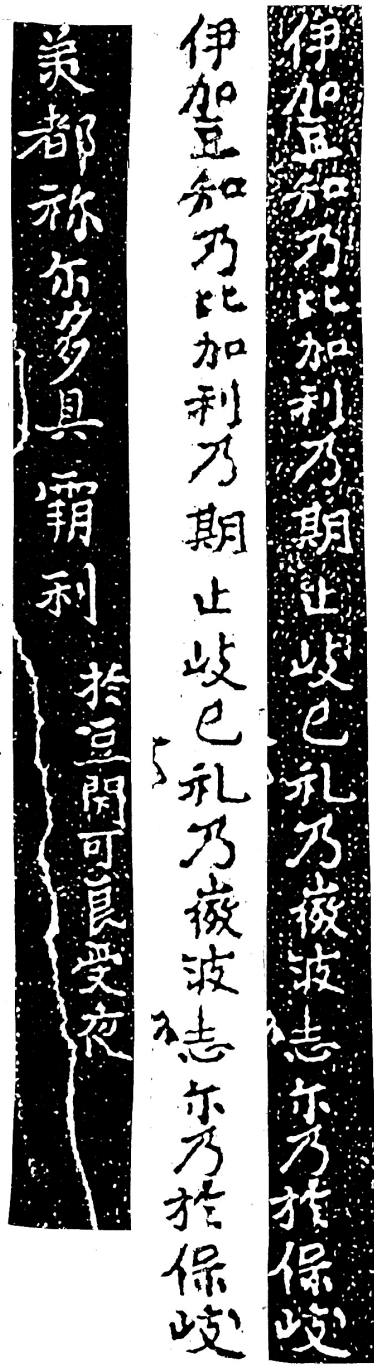
与都乃閑美伊都乃毛乃〻阿都麻礼流伎多奈

与都乃閑美伊都〻乃毛乃〻阿都麻礼流伎多奈

伎嶽乎婆伊止比須都閑志　波奈礼須都倍志

伎嶽乎婆伊止比須都閑志　波奈礼須都倍志

20行目



伊加豆知乃比加利乃期止岐已礼乃微波志尓乃於保岐
美都祢尔多具霊利　於豆閇可良受夜

21行目

比多留比乃多尓
佐尓佐牟我多米尓
須理師毛止牟与彼比止毛止元
佐麻佐牟我多米尓

佛足跡歌碑銘文についての先行研究では、廣岡義隆氏による「佛足石記佛足跡歌碑本文影復元」『三重大学日本語学文学　第一巻』所収一九九〇及び、『佛足石記佛足跡歌碑歌研究』（和泉書院、二〇一五）がある。これらの研究を参考にしつつ、今回、原刻、精拓本および、薬師寺の許可による飛鳥園撮影の写真によって考証を加え書としてできるだけ忠実に復元してみたものが以上の図版である。できるだけ摩滅前の文字の姿を再現することを目指した。

三、佛足跡歌碑の12番歌から21番歌について

先の論考[1]で指摘したように、佛足跡歌は『観佛三昧海経』の強い影響を受けたことが想定されるため、12番歌から21番歌についても、『観佛三昧海経』の影響を念頭に置きながら、「本文、読み、意訳」を提示する。なお「本文、読み、意訳」は読みやすさを優先して常用漢字を使い、現代仮名遣いを用いることとする。

【12番歌】

（本文）佐伎波比乃　阿都伎止毛加羅　麻為多利弖　麻佐米尓弥
祁牟　比止乃止毛志佐　宇礼志久毛阿留可[2]

（読み）さきはひの　あつきともがら　まいたりて　まさめにみけむ　ひとのともしさ　うれしくもあるか

（意訳）幸いにめぐまれて、釈尊の足跡の実物を拝見した人々のことをうらやましく思うが、足跡を刻んだ佛足石を拝見できたので、とてもうれしく思える。

【13番歌】

（本文）乎遅奈伎夜　和礼尓於止礼留　比止乎於保美　和多佐牟多米止　宇都志麻都礼利　都加閇麻都礼利

（読み）をぢなきや　われにおとれる　ひとをおほみ　わたさむためと　うつしまつれり　つかへまつれり

（意訳）この世に生きる人間は無力なもので、私よりも劣る人が多いが、彼らを悟りの彼岸に渡すために、釈尊の足跡を石に写し刻んでおまつりするのだ。

【14番歌】

（本文）舍加乃美阿止　伊波尓宇都志於伎　由伎米具利　宇夜麻比麻都利　和我与波乎閇牟　己乃与波乎閇牟

（読み）さかのみあと　いはにうつしおき　ゆきめぐり　うやまひまつり　わがよはをへむ　このよはをへむ

（意訳）釈尊の足跡を石に写して刻み、佛足石のまわりをめぐってうやうやしくおまつりし、この世に受けた生を終えることにしよう。

【15番歌】

（本文）久須理師波　都祢乃母阿礼等　麻良比止乃　伊麻乃久須理師　多布止可理家利　米太志可利鶏利

（読み）くすりしは　つねのもあれど　まらひとの　いまのくすりし　たふとかりけり　めだしかりけり

（意訳）昔から参拝してきた仏様の像もあるが、このたび異国から

伝来した釈尊の足跡もまた尊いものなので、心ひかれる思いがする。

【16番歌】

（本文）己乃美阿止乎　麻婆利麻都礼婆　阿止奴志乃　多麻乃与曽
保比　於母保由留可母　美留期止毛阿留可

（読み）このみあとを　まばりまつれば　あとぬしの　たまのよそ
ほひ　おもほゆるかも　みるごともあるか

（意訳）佛足石のまわりをめぐると、三十二相八十種好という特徴をお持ちの釈尊の気高く美しいお姿が心に浮かび、まのあたりに拝見するかのようである。

【17番歌】

（本文）於保美阿止乎　美尓久留比止乃　伊尓志加多　知与乃都美
佐閇　保呂歩止曽伊布　乃曽久止叙伎久

（読み）おほみあとを　みにくるひとの　いにしかた　ちよのつみ
さへ　ほろぶとぞいふ　のぞくとぞきく

（意訳）釈尊の足跡を参拝に来る人は、その功徳によって、何度も生まれ変わり死に変わりして犯してきた諸々の罪さえも滅除できるそうだ。

【18番歌】

（本文）比止乃微波　衣賀多久阿礼婆　乃利乃多能　与須加止奈礼
利　都止米毛呂毛呂　須々売毛呂母呂

（読み）ひとのみは　えがたくあれば　のりのたの　よすかとなれ
り　つとめもろもろ　すすめもろもろ

（意訳）人間として生まれることは得がたく、仏の教えを修得する貴重な機会であるから、誰もがみな仏道につとめはげまねばならない。

【19番歌】

（本文）与都乃閇美　伊都々乃毛乃々　阿都麻礼流　伎多奈伎微乎
婆　伊止比須都閇志　波奈礼須都倍志

（読み）よつのへみ　いつつのものの　あつまれる　きたなきみを
ば　いとひすつべし　はなれすつべし

（意訳）地水火風の四大と色受想行識の五蘊によって構成された身体は、煩悩にとらわれた無常の存在なので、執着せずに捨てさるべきだ。

【20番歌】

（本文）伊加豆知乃　比加利乃期止岐　己礼乃微波　志尓乃於保岐
美　都祢尓多具覇利　於豆閇可良受夜

（読み）いかづちの　ひかりのごとき　これのみは　しにのおほき
み　つねにたぐへり　おづべからずや

（意訳）人の身は雷の光のように一瞬で消え去り、常に死と隣り合わせのものなので、そのはかなさを恐れるべきではないか。

【21番歌】

（本文）□都□□□　□□□□比多留　□□乃多尓　久須理師毛止

牟　与伎比止毛止无　佐麻佐牟我多米尓

（読み）□つ□□□　□□□□ひたる　□□のたに　くすりしもとむ　よきひともとむ　さまさむがために

（意訳）人々を迷いから目覚めさせるために、仏のお力におすがりしたい。

四、佛足跡歌に見える『観佛三昧海経』の影響

先の論考[3]の第六節および本稿の前節において、『観佛三昧海経』の影響を念頭に置きながら、佛足跡歌の解釈を試みた。本節では1番歌から21番歌のなかで『観佛三昧海経』と親和性が強いと目される歌を取り上げ、その内容をさらに細部にわたって検討することとしたい。

①佛足跡歌2番歌―三十二相・八十種好と『観佛三昧海経』

本項では2番歌にある「みそちあまり　ふたつのかたち（三十二相）」「やそくさ（八十種好）」について考察する。三十二相は釈尊に備わる特別な好相で、経典では釈尊が引き起こす不可思議な現象と関連付けて描かれることもある。八十種好は八十随形好ともいい、三十二相をさらに細分化した好相のことである。

三十二相は様々な経典に記載が見られるが、各経典に記される好相が大きく異なることはない。例えば主要な経論である『長阿含経』と『大智度論』を比較すると、『長阿含経』巻一にある「胸有萬字」が『大智度論』巻四にはなかったり、『大智度論』巻四にある「足趺高満相」が『長阿含経』巻一になかったりするなど数箇所の異同が確認されるが、ほぼ同内容である。

薬師寺佛足石銘文には、『観佛三昧海経』からの出典であることが明示された上で「如来の足下は平満にして一毛をも容れず、足下の千輻輪相は轂輞具足す」（序観地品からの引用）と「仏世に在し時、若し衆生有りて、仏の行くを見る者あり、千輻輪相を見るに及んでは即ち千劫の極重悪罪を除かる」（観四威儀品からの引用）と記される。これは『長阿含経』巻一に挙げる三十二相の「一者足安平、足下平満、蹈地安隠。二者足下相輪、千輻成就、光光相照」、および『大智度論』巻四の「一者足下安平立相、足下一切著地間無所受、不容一針。二者足下二輪相千輻輞轂三事具足」に該当するものである。したがって、佛足跡歌の三十二相・八十種好が薬師寺佛足石銘文と同様に『観佛三昧海経』を出典としたものである可能性も想定すべきである。

②佛足跡歌4番歌―八万の放光と『観佛三昧海経』

本項では4番歌の「やよろづひかりを　はなちいだし」に着目し、八万の光を放つことと『観佛三昧海経』の関連について考察する。2番歌の三十二相・八十種好が『観佛三昧海経』に基づく可能性があることはすでに述べたが、同経観相品の「我今見仏三十二相八十種好。身黄金色、一一相好無量光明」（大正一五、六六〇下）[4]や、同じく観相品の「是名如来八十好中一好光明。如是八十随形好光、説不可尽」（六六三中）という記述に見られるように、「光明」は三十二相・八十種好にともなうものである点から、4番歌の「光」は2番歌の三十二相・八十種好と関連している可能性も想定される。

また4番歌にある八万の光とは、『観佛三昧海経』に説かれる八万四千の光である可能性が高いように思われる。観相品の「仏身毛孔一一孔中、旋生八万四千微細諸小光明、厳飾身光極令可愛」（六六〇上）、観相品の「爾時世尊放肉髻光。其光千色、色作八万四千支、一一支中、八万四千諸妙化仏」（六六三上）や観四威儀品にも「仏於衆中挙身放光。前八万四千、左八万四千、右八万四千、後八万四千、頂八万四千、是諸毛孔」（六八二上～中）とあり、この他にも『観佛三昧海経』では八万四千の光が複数の箇所で説かれている。したがって、4番歌が『観佛三昧海経』のストーリーに沿って作られたという可能性を想定することができる。

③佛足跡歌5番歌―龍に対する戒めとしての仏跡と『観佛三昧海経』

薬師寺佛足石正面銘文では、『大唐西域記』巻三、烏仗那国（大正五一、八八二中～下）の記事を基にして、

又北印度の烏仗那国の東北二百六十里にして大山に入るや、龍泉有り。河の源にして、春夏に凍を含み、晨夕に飛雪あり。暴悪の龍有りて、常に雨水の災あり。如来往きて化し、金剛神をして杵を以て崖を撃たしむ。龍聞きて驚怖し仏に帰依す。悪心の起こるを恐れ、跡を留めて之れに示す。泉南の大石の上に於いて其の双跡を現す。心の浅深に随いて、量に長短有り。

という逸話が刻されている。これは、釈尊が金剛神に命じて烏仗那国にいた暴悪の龍を戒め、以後悪心を起こさぬように、大石の上に足跡を残したという内容である。

5番歌の「いはのうへを　つちとふみなし　あとのけるらむ」は、佛足石正面銘文にある上記の逸話をもとに作られたものと推定される。『観佛三昧海経』巻七、観四威儀品（大正一五、六八一上～中）には、釈尊が金剛神に命じて那乾訶羅国の毒龍を戒め、龍が悪心を起こすことを防ぐために、

釈迦文仏は身を踊らせて石に入り、猶明鏡に人の面像を見るが如し。諸龍は皆、仏の石内に在り外に映現するを見る。爾の時諸龍は合掌して歓喜す。

という行動をとったという記載が見られる。『大唐西域記』と『観佛三昧海経』の記載は、国名の違い、足跡と全身像の違いという点が指摘できるが、両者の文脈は共通している。

玄奘が将来した七躯の仏は『大唐西域記』巻一二に列挙されているが、その六番目の仏像は「金仏像一躯。通光座高三尺五寸。擬那揭羅曷国伏毒龍所留影像」（大正五一、九四六下）であり、これは『観佛三昧海経』に説かれる那乾訶羅国の仏像のことである。[5] つまり、玄奘は烏仗那国と那乾訶羅国の龍の逸話の双方を『大唐西域記』に記載しており、話の類似性については十分承知していたことがわかる。

『観佛三昧海経』にある逸話は、初唐の道宣撰『釈迦氏譜』巻一にも「釈迦留影在石室記」（大正五〇、九七下）として収められており、当時は比較的有名な話であったことが想定される。したがって、日本においても二つの逸話が類似したものとして認識されていた可能性が考えられ、5番歌は『観佛三昧海経』とも関連する歌として認識する必要があるように思われる。

④佛足跡歌9番歌と17番歌―弥勒信仰と『観佛三昧海経』

9番歌には「のちのほとけに　ゆづりまつらむ　ささげまうさ

む」とあり、石に刻んだ釈尊の足跡を「後の仏」にお渡ししたいという願いが歌われている。先学が「のちのほとけ」を弥勒菩薩と解したことは妥当であるが、[6] 管見の限りではそれ以上の考察はなされておらず、9番歌の弥勒菩薩と『観佛三昧海経』の関係についてはまだ研究されていないようである。『観佛三昧海経』に弥勒菩薩が何度も登場し、例えば観相品に「未来有仏、号曰弥勒、亦当敬礼」（大正一五、六六〇下）とあるように、弥勒菩薩が未来仏であることが明示されていることから、9番歌と『観佛三昧海経』との関連を検討する必要があると判断される。

『観佛三昧海経』観像品（六九〇上～中）には、

爾の時、弥勒菩薩は仏に白して言う、…中略…仏が現在せざれば、何所に依怙して罪咎を除くべきや、と。仏は弥勒に告げたり、…中略…如来滅後に多く衆生有り、仏を見ざるを以て諸悪法を作す。是くの如き等の人には当に像を観さしむべし。若し観像の者あらば、我が身を観ると等しく、異なり有ること無し。

とあり、弥勒菩薩が釈尊に罪業を除く方法を問うたところ、「釈尊の像を見せなさい」という教えを受けたことが記されている。観像品では釈尊の頭部から足の指に至るまで全身を思い描く観想が説かれており、9番歌の背景に『観佛三昧海経』がある可能性は大きいと言えよう。

また17番歌に「ちよのつみさへ　ほろぶとぞいふ　のぞくとぞきく」とあるように滅罪の信仰が看取されるが、これも『観佛三昧海経』における観像を通した滅罪との関連が想起される。ここから、9番歌と17番歌が『観佛三昧海経』を媒介として関連している可能性が考えられる。

⑤佛足跡歌15番歌―「くすりし」と『観佛三昧海経』

15番歌にある「くすりし」について様々な見解が提示されているが、定説と言えるものは無いようである。[7] 「くすりし」の解釈の一つ目は、そのまま「薬師」と読み、薬師寺創建以来おまつりされている薬師如来を指すとするものである。この場合、15番歌にある「つねの」ものとは薬師寺の薬師如来で、「いまのくすりし」は新たに唐から伝来した釈尊の足跡を指すと解することになる。

二つ目の解釈は、薬師寺の薬師如来との関係を認めず、「くすりし」は『涅槃経』の「旧医」や「客医」[8] に該当するというものである。この説は、古代に「薬師」を「くすし」と読む事例があることから、「医（くすし）」に通ずるとするもので、一定の説得性を有すると言える。しかし、「医」を「くすりし」と読む事例を提示できていないという弱点があることも否めない。

廣岡氏が指摘するように、仏には「医王」という別称があり、[9] 人の病を治す「くすりし」を必ずしも薬師如来という一つの尊格のみを指すと限定せず、幅を持って理解することが必要であるように思われる。というのは、仮に15番歌の最初の「くすりし」が薬師如来を指すとしても、二番目の「くすりし」は明らかに薬師如来を指すのではなく、釈迦如来の足跡を指すと解されるからである。

ここで、15番歌と『観佛三昧海経』の関係について考察を試みたい。前項で取り上げた『観佛三昧海経』観像品では、『観佛三昧海経』の核心ともいうべき釈尊の像を観想する観佛三昧という修行法が説かれている。観像品の観像坐法を説く箇所には「観佛三昧は良

薬を服し四大を利益するが如し。此の薬を服する者は不老不死なり」（六九一下）と記されている。つまり、佛足跡歌の作者が観佛三昧を説く釈尊を「くすりし」と表現したとしても、それは全く不自然なことではない。本項では、「くすりし」と『観佛三昧海経』が関連する可能性を提示するにとどめることとする。

⑥佛足跡歌19番歌　四大五陰と『観佛三昧海経』

本項では、19番歌にある「よつのへみ」「いつつのもの」、すなわち地水火風の四大と色受想行識の五蘊（五陰）に関連する『観佛三昧海経』の記載を確認することとしたい。

廣岡氏は、『涅槃経』『金光明経』に四匹の蛇の比喩があることを提示し、これは当時の知識人の間で広く知られていた比喩であることを明らかにしている。[10] 四匹の蛇の比喩は『観佛三昧海経』の中に確認できないが、巻九、観像品で仏の像を観想する過程を説く箇所に「我身の如き者は、四大五陰の共に合成する所なり。芭蕉樹中に堅実無きが如し。水上の沫の如し。水中の月の如し。鏡中の像の如し。熱時の焔の如し。野馬の行くが如し。乾闥婆城の如し」（六九二中）とあり、四大五陰に実体がなく執着すべきものではないことが記されている。ここに記される四大五陰に対する認識は、特定の経典に限られる特殊なものではない。つまり『観佛三昧海経』の文脈で思考しつつ、『涅槃経』『金光明経』にある有名な比喩を引用したという可能性も想定される。ここでは、19番歌の内容は『観佛三昧海経』に沿ったものである点を指摘するにとどめることとしたい。

佛足跡歌の全体を通して、『観佛三昧海経』の逸話を主要なモチーフとしている可能性が強いことから、先の論考に続けて更に掘り下げて考察をおこなった。奈良時代における仏教信仰は難解な教理を学ぶだけではなく、経典に記される不可思議な現象についても仏の救いとして受け入れていたようである。不可思議な現象に対する信仰を不合理であると批判することは容易であるが、永遠の時間・無限の空間という壮大な神話的世界の中で智慧と慈悲を指針として真摯に生きていた点で、奈良時代の日本人が現代の我々よりも涅槃や生死の真相に肉薄していた可能性すら想起させられると言えよう。

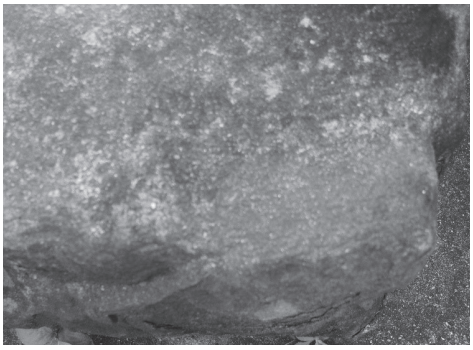
五、中世の佛足石調査

本研究発足以来、従来研究では存在しないと考えられて研究史のうえで全く言及されてこなかった中世の佛足石について、[11] 京都府及び大阪府と滋賀県に所在を確認し、その存在と特徴を明らかにしてきた。本報告では、新たに大阪四天王寺と京都清水寺の佛足石を中世佛足石として報告したい。

大阪四天王寺境内にある佛足石は写真1に見るような形状で、写真2に切欠き部分が明瞭に看取できる。切欠き部分にあるはずの線刻仏は長年月の露天風化のためすでに磨耗して確認できないが、これは数少ない中世の佛足石の共通する特徴と考えられるもので、全体の形状も本研究最初に確認した安土城の佛足石と類似した形状を示しているといえるだろう。四天王寺には、親鸞との所縁を示す伝承があるが、残念ながら、親鸞と四天王寺の直接的関係を示す文書、古記録類には接しない。昨年までの調査によって、中世佛足石と、

▼写真1　四天王寺佛足石

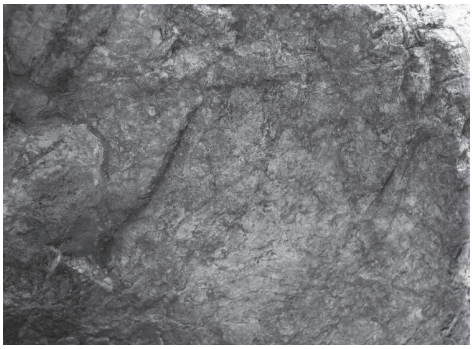
▼写真2



浄土宗との関係性を想定していたので、法然の高弟である親鸞ゆかりの伝承と四天王寺の佛足石の存在にはなんらかの関係があるものと推定することは可能だが、現時点では史料が残されていないので不明とせざるを得ないのは残念である。四天王寺には、「丙子椒林剣」、「七星剣」という聖徳太子ゆかりの古代の直刀をはじめ、「扇面法華経冊子」五帖九十八葉、「四天王寺縁起」などの国宝指定の文化財が多く伝来している。古代の直刀の遺物は、出土遺物以外は寺社の数少ない伝世品であるが、四天王寺には国宝指定の直刀が二振り伝来している。一方で建築遺構としては、度重なる天災と戦乱によって創建当初の伽藍はもちろん中世までに再建された伽藍もほとんど残されてはいない。南北朝時代の建武五年・延元三（一三三八）年五月の天王寺合戦の戦場となっているが、被害は不明である。次に、康安・正平の大地震と知られる康安元年・正平一六年六月二十四日（ユリウス暦一三六一年七月二十六日）の大規模地震は、前年十月の大地震に誘発されて発生し、四天王寺では金堂が倒壊して各伽藍も被害を受けたと記録されている。現在の地震学研究では、康安・正平の大地震は、東海・東南海・南海トラフ連動型地震であったとされ、マグニチュードは八・五、摂津・阿波・土佐で大津波が発生して多数の死者が出たと記録されている。[12] 二年連続の大地震で四天王寺は大きな被害を受けたことは間違いない。次に、応仁の乱では、東軍が四天王寺を拠点のひとつとして占拠していたために、応仁元（一四六七）年七月に、西国より東上してきた西軍の大内政弘率いる中国勢により攻撃放火され、やはり多くの伽藍が焼け落ちた。さらに戦国時代末期の天正四（一五七六）年五月七日に織田信長の石山本願寺への攻撃である石山合戦でも戦場となったため、織田軍の放火により伽藍の多くが炎上し寺領も信長によって没収されている。その後豊臣政権によって再建復興が全面的に行われ、秀頼からは寺領の寄進も行われたが、慶長十九年と翌二十年両度にわたって大坂冬の陣、夏の陣があって、特に夏の陣は四天王寺周辺が最後の主戦場となって四天王寺は大きな被害を受けた。四天王寺は、東に奈良街道、西に紀州街道が南北に並行しており、奈良街道は東軍主力、紀州街道は浅野勢が北上する進路にあたっていたことが四天王寺が主戦場のひとつとなった大きな理由である。四天王寺からほど近い安居天神が真田信繁戦死の地として伝えられるように、慶長二十年五月七日、天王寺付近一帯で激戦が展開されたので、四天王寺の荒廃は決定的となったと思われる。その後、徳川将軍秀忠による再建も、享和元（一六

二三）年の落雷による火災で境内東半分の所在する伽藍は灰塵に帰してしまった。文化十（一八一三）年に大坂の豪商が再建した伽藍は昭和期まで健在であったが、昭和九（一九三四）年九月二十一日の室戸台風と昭和二十（一九四五）年三月十三・十四両日の大阪大空襲で全焼している。飛鳥寺と並んで日本で最も古い歴史を持つ寺院である四天王寺の歴史を概観すると、以上のように長い歴史の中で、しばしば多くの伽藍が失われていることがわかる。佛足石は、伽藍が失われて再建されるまでの間の信仰の具体的対象として崇敬されていたものと推測される。おそらく南北朝期の動乱の最中の大震災後か、応仁の大乱の後に設置された可能性が高いとみられる。いずれも戦乱の連続の中、寺領庄園は武士の押領するところとなり、四天王寺の財政は極端に困窮して伽藍の再建は困難を極めていた時期であり、焼失後の伽藍再建までかなりの年数が経過しているのはこの二つの時期である。佛足石が設置されたのは、このいずれかの時期が想定される。

▼写真3　清水寺佛足石



▼写真4

次に京都市にある有名な観光寺院である清水寺にある佛足石について述べる。

清水寺佛足石の存在は、境内地で公開されているので存在自体は古くから知られていたが、近年の本堂の大修理事業のため本研究では研究開始後しばらく調査することができなかった。ようやく令和三年になって修理が終わり見学が可能となったのである。写真3に見るように、形態としては薬師寺の古代佛足石に近い自然石の形状を残して作製されたと思われるもので全体に古態を示している。また写真4に見るように、加工した面の痕跡が確認できる。ここに他の中世佛足石に見られるような線刻の仏像があったかどうかはわからない。しかし、石の数か所に同様の加工した部分が残されており、何らかの彫像があったと推定される。この佛足石については、他の中世佛足石と同様に清水寺では何の伝承も記録も残されてはいない。従っていつごろから境内に置かれているかも知ることができない。清水寺とその支院を含めての文書記録類の悉皆調査が行われれば、あるいはこの佛足石に関連するなんらかの記載を見つけることができるかもしれないが、現状では不明である。

清水寺は八世紀の創建以来、法相宗興福寺の支配する寺院であったことから、興福寺と延暦寺の繰り返される抗争のため延暦寺からの攻撃対象となってきた。また火災や応仁の乱などでも多くの寺社同様焼失を繰り返しており、創建以来九回の大火災があったとされている。このため、現在残されている伽藍の中で古代・中世に遡

る建築物は、境内春日社が戦国時代と推定されているのが、明確な建築年次の記録はないものの、中世に遡る可能性が高い唯一の建築遺構である。ほかは、慶長十二年の鐘楼が年代の判明する最古のもので、国宝本堂が寛永十（一六三三）年の建築であるように、そのほとんどが寛永年間以降の建造物である。このように繰り返し火災に見舞われた清水寺であるが、焼失後いずれも短期間で再建されていることが特徴的である。従って長期間伽藍が焼失したまま荒廃した時期はなかったといってよいだろう。清水寺の佛足石が、近世以前の佛足石の中で、薬師寺のものを除くともっとも古態を示す理由は、この点を無視して想像することはできない。おそらくは、安楽寺、四天王寺のように、布教の拠点としての伽藍が整わない中での役割を担って設けられた佛足石ではなく、清水寺創建当初から佛足石信仰の対象として境内地に置かれたのではないだろうか。

今回の調査で、薬師寺の佛足石が近世中期以降、特に後期に至って各地に伝播した一例として、延暦寺の西塔佛足石について付言する。当初この佛足石は磨耗が進み佛足石の文様が古態を示していたので中世に遡るものとも見られたが、佛足文様が薬師寺佛足石に酷似しているだけでなく、近世史料によって薬師寺との所縁深い僧侶によって寄進されたものと判明した[13]。近世後期には、薬師寺佛足石が広く知られるようになって、それを模した佛足石が畿内を中心に広く設置されたことを知ることができる。

六、結びにかえて

本研究は、武蔵野大学「しあわせ研究」の基金を受託により「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続してきた。初期仏教の日本での展開の一形態として天平勝宝五（七五三）年の年紀を刻する国宝薬師寺佛足石を研究の基礎と位置づけ、その碑文の研究を中心として従来の先行研究を踏まえながら、新たな字句の翻刻と修正、またその意味するところを広く紹介するために新たに分かりやすく解釈した。また古代の薬師寺佛足石以外の佛足石については、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であったが、中世の佛足石が前回までの調査で京都法然院、安土城、泉南市林昌寺・京都の慈照寺銀閣と住蓮山安楽寺にも存在することが分かった。さらに今回の調査で二つの存在を加えることが出来た。

薬師寺佛足石・佛足跡歌碑の碑文についての本研究は、従来の研究蓄積をさらに前進させることができた。また中世佛足石の存在とその特徴の確認は、佛足石研究において、空白とみられていた中世佛足石の発見に資することができるようになった点で大きな成果といえるだろう。

今回も、薬師寺の国宝佛足跡歌碑銘文の調査研究を行うことができたが、調査にご協力くださった所蔵者である薬師寺に深く感謝申し上げたい。また、奈良の薬師寺から特別許可を得ることができて、大講堂内で銘文を拝見しつつ調査させていただけたことは望外の幸せであった。おかげさまでこの歌碑においてもその書美をわかる範囲で再現することができた。

今後も仏教を中心とした文化の研究を推し進めていきたいと考え

ている。

○本研究は、第一・二・六節を廣瀬、第五節を漆原、第三・四節を遠藤が執筆した。

○本研究は、武蔵野大学しあわせ研究所「令和三年度しあわせ研究費」採択によるものである。

【註】

（1）廣瀬裕之・漆原徹・遠藤祐介「薬師寺・佛足跡歌碑の研究Ⅰ―碑面上半部に刻された書とその内容について―」（『武蔵野教育学論集』一〇、二〇二一年）第四節「佛足石と佛足跡歌碑」を参照。

（2）「麻佐米尓弥□牟」の□について、廣岡義隆『佛足石記佛足跡歌碑歌研究』（和泉書院、二〇一五年、以下『歌碑歌研究』と略す）二二二頁・二八七頁では3番歌「麻佐米尓美祁牟」の重複とみて、「祁」を補っている。奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観補訂版』第六巻（岩波書店、二〇〇〇年、以下『六大寺』と略す）「薬師寺全」一一七頁も「祁」を補っている。本稿も3番歌の重複と解して、「祁」を想定して読みと意訳を作成した。また、「比止乃止毛志□」の□について、『歌碑歌研究』二九〇頁と『六大寺』一一七頁はいずれも「佐」を推定している。本稿も「佐」を想定して読みと意訳を作成した。

（3）廣瀬裕之・漆原徹・遠藤祐介前掲論文を参照。

（4）『大正新脩大蔵経』は大正と略し、その後に巻数、頁数、段を記す。

（5）肥田路美『仏蹟仰慕と玄奘三蔵の将来仏像―七躯の釈迦像の意味をめぐって』（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊四八、二〇〇二年）一五九、一六四、一六五頁を参照。

（6）『歌碑歌研究』二七四～二七七頁で、廣岡氏が諸先学の説を紹介しつつ考察している。

（7）『歌碑歌研究』三〇〇～三〇九頁を参照。

（8）15番歌の「つねの」ものは『涅槃経』の「旧医」に該当すると解し、さらに「まらひとのいまのくすりし」の「まらひと」を「まらうど」すなわち「客」と解釈し（『歌碑歌研究』三一一頁を参照）、『涅槃経』の「客医」に該当すると解している。

（9）『歌碑歌研究』三〇八～三〇九頁を参照。

（10）『歌碑歌研究』三三三～三三七頁を参照。

（11）『日本仏足石探訪見学箚記』　加藤諄　二〇〇七年　雄山閣

（12）東京大学地震研究所『新収　日本地震史料一巻』日本電気協会、一九八二年　自允恭天皇五年至文禄四年

（13）「妙有上人」青木龍考　『雙龍』第六号　一九七三年
同論考は、薬師寺の山本氏にご教示を賜った。これによると、江戸時代後期天明元年生まれの妙有上人が、薬師寺佛足石を模して延暦寺西塔に佛足石を寄進したことが自伝により判明する。

＊　武蔵野大学教育学部
†　武蔵野大学文学部
††武蔵野大学グローバル学部